

# 集中講座におけるプロジェクトワーク

白石文子 Shiraiishi, Fumiko

(ボーフム・ルール大学外国語教育研究所、日本語学科 <ヤポニウム>  
Landesspracheninstitut in der Ruhr-Universität Bochum,<sup>1</sup> Japonicum)

## 要旨/Zusammenfassung

自律学習を支援するため、協働学習のひとつの形態であるプロジェクトワークを授業に取り入れることは多い。では、そのプロジェクトワークを2週間の短期集中講座で行った場合、どのようなことが可能で、どのようなことが起こり得るであろうか。10年余に渡って上級コースで行ってきたプロジェクトワークの中から、インタビュー・プロジェクトを例に取り、集中講座でのプログラム全体で占める位置、他の授業との関係を示す。また、それ以外に実際に取り扱った「テーマ・内容」を、どのように「進め」、その過程の中でどのような長短の「成果」が得られたかを探る。協働学習の影響が、コース全体に及ぼす大きさにいつも驚かされるが、その成功の可否を握るものは何か。その時の教師の役割は何か。プロジェクトワークの教育効果および教育上の課題、協働学習の観点から利点・問題点に触れる。

Projektarbeit ist eine Form des kooperativen Lernens, die im Unterricht eingesetzt wird, um das autonome Lernen zu unterstützen. Welche Möglichkeiten ergeben sich, wenn man eine Projektarbeit während eines knapp zweiwöchigen Intensivkurses durchführt? Und was kann in einem solchen Kurs passieren? Anhand eines Interview-Projekts, das wir seit über 10 Jahren im Oberkurs einsetzen, soll gezeigt werden, welchen Stellenwert die Projektarbeit im Intensivkurs hat und in welcher Beziehung sie zu den anderen Unterrichtsstunden steht. Darüber hinaus werden die „Themen und Inhalte“ von weiteren Projektarbeiten und ihre Durchführung behandelt. Es wird untersucht, welche Risiken und Chancen im Laufe einer Projektarbeit entstehen. Kooperatives Lernen hat immer auf den gesamten Kursverlauf einen prägenden Einfluss. Was sind die Voraussetzungen für den Erfolg? Welche Rolle nehmen die Lehrenden ein? Welche Vor- und Nachteile hat das kooperative Lernen?

---

1 ロシア語学科、中国語学科、アラビア語学科、日本語学科の4つの研究所からなり、集中講座を行う宿泊施設を備えた研究所 [www.lsi-bochum.de](http://www.lsi-bochum.de).

## 1 はじめに

当研究所、ボーフム・ルール大学外国語教育研究所（以下LSI）、日本語学科（以下ヤポニクム）では、年間十数回の2週間から3週間の集中講座を行っている。そのほとんどが初級コースであるが、一年に最低一度は上級コースも行う。期間は2週間で、週末の土日も含めて12日間である。その上級コースでプロジェクトワークを取り入れているが、その形態は、大学のそれとはかなり異なる。12日間のみ短期集中講座でプロジェクトワークをするのは何のためなのか。協働学習をすることの意義はどこにあるのだろうか。本稿では、ヤポニクムの上級コースにおけるプロジェクトワークの進め方を紹介するとともに、最近の具体例を挙げ、分析し、その意義を考える。

自律的学習をしている学習者にとって、「外国語学習にとっては必須のグループ活動ができるという点で、プロジェクトワークは理想的な活動」（田中・齊藤 1993）と言われている。中・上級になると、読解にしろ、聴解にしろ、個人で行う作業が多くなる。そのような習慣に慣れ親しんできている学習者は、この短期集中講座でインターアクションを行えるチャンスが与えられているにもかかわらず、個人の殻に閉じこもり学習しようとする。グループ学習を拒否し、一人で勉強するのであれば、ヤポニクムに来て勉強する意義はないのではないか。教師から知識を得るだけでなく、相互活動を通して、学習者同士でお互いに学んだことをシェアしながら学習する。そうすることによって自律的に学習することをもっと身につけてコースを終えてもらいたいと、ヤポニクムのスタッフは考えている。

## 2 インタビューの導入

ヤポニクムでは、90年代に上級コースの授業の一環としてインタビューを取り入れた。教師以外の日本人と話すことが大切とされていた時代である。しかし、電話で約束をし、会って話をして帰ってきただけであり、プロジェクトなどとはとても呼べるものではなかった。また、最終的にグループ全体でなんらかの成果を得るようなテーマも決まっておらず、話をするだけの内容のないインタビューに意義を見出すことはできなかった。

その後、当時は日本経済に興味を持ち日本語学習を始めた学習者が多くいたため、デュッセルドルフへ出向き、日本企業・機関でインタビューするプロジェクトが始められた。しかし、参加者が日本経済に興味を持っていると言っても、彼らの日本語能力がそれに伴っているわけではなく、質問を必死に考え、分からない時の聞き返しなどを練習してインタビューに臨んでも、応答の内容はあまり分からずに戸惑って帰ってくることも多くあった。学習者と一緒にその応答を録音したテープを何度も聞き、まとめあげるのは、教師にとっても至難の業であった。学習者にはプロジェクトをするためのモチベーションは十分に備わっていたが、能力が不足していた。

その能力を補う方法を教師自身もいろいろ勉強し、試行錯誤しながらではあるが、プロジェクトワークを上級コースの一つの要素として取り入れ、そこに協働学習の意義を見出してきたのである。個人学習になりがちな上級コースでもグループで学び合うことのおもしろさ、楽しさが実感でき、教室外でも一緒に学習することが授業中の作業の円滑化につながるという事実を、学習者とともに教師自身が体験していったのである。協働学習がコースに及ぼす良い状況を教師が結果的に学んだといってもよいだろう。

### 3 上級コースの概要

以下にまず上級コースの概要を述べる。

ヤポニクムのコース全般に言えることであるが、コース参加者は自分の意志でコースに参加することを決め、申し込む。だから、日本語を勉強することへの動機付けはかなり高いと言える。現在はドイツの大学でも授業料を導入している所がかなりあるが、ヤポニクムではそれより高い授業料を払わねばならず、しかも、ほとんどの参加者は宿泊代も必要とする。それにもかかわらず日本語を勉強したいと参加を決意してくるのであるから、支払った分は元を取らねばと期待も高く、モチベーションは高い。しかし、何をどう向上させたいか問うても「日本語がうまくなりたいです。」という漠然とした答えが返ってくるだけなのである。

上級コース、第1週					
月	火	水	木	金	
	8:30-10:10 練習 L:1	8:30-10:10 練習 L:2	8:30-10:10 練習 L:3	8:30-10:10 練習 L:4	
	10:30-12:15 プロワ (2)	10:30-12:15 ビデオ (1-1)	10:30-12:15 プロワ (4)	10:30-12:15 ビデオ (2-1)	作文
13:00-14:00 オリエンテー ション	14:00-15:30 和訳 (1)	14:00-14:30 ディベート (1)	14:00-15:00 和訳 (2)	13:15-19:00 インタビュー (デュッセル ドルフ)	インタ ビュー
14:00-15:00 プロワ (1)		14:30-15:30 プロワ (3)	15:00-16:00 ビデオ (1-2)		まとめ
15:15-17:15 色塗り L:1	15:45-17:15 色塗り L:2	15:45-17:15 色塗り L:3	16:15-17:15 色塗り L:4		
17:15-17:30 リラックス	17:15-17:30 リラックス	17:15-17:30 リラックス	17:15-17:30 リラックス		

上級コース、第2週					
月	火	水	木	金	
8:30-9:40 ビデオ (2-2)	8:30-10:10 練習 L:5	8:30-10:10 練習 L:6	8:30-9:40 ビデオ (3-2)	8:30-10:10 練習 L:7	
10:00-12:15 プロワ (5)	10:30-12:15 ビデオ (3-1)	10:30-11:00 ディベート (4)	9:40-10:10 ことわざ比 べ	10:30-11:30 発表	
		11:00-12:15 プロワ (7)	10:30-12:15 プロワ まと め	11:30-12:15 反省会	
14:00-14:30 ディベート (3)	14:00-15:30 プロワ (6)	14:00-16:00 新聞	14:00-14:30 ディベート (5)		
14:30-15:30 和訳 (3)			14:30-15:30 和訳 (4)		
15:45-17:15 色塗り L:5	15:45-17:15 色塗り L:6	16:00-18:00 作文	15:45-17:15 色塗り L:7		
17:15-17:30 リラックス	17:15-17:30 リラックス		17:15-17:30 リラックス		

上級の授業内容は、プロジェクトワークだけではなく、読解（読む）、和訳（定まった内容を日本語で表現する・書く）、ディベート（話す）、ドラマ（聴く・観る）の授業などが同時

に平行して行われる。週末には作文を書く宿題も出される。いわゆる 4 技能をすべて網羅するべく考えられた時間割である。プロジェクトワークはそのすべての 4 技能を使わなければならない。時間帯は、午前の授業は 8 時 30 分から 12 時 15 分、午後は 14 時から 17 時 30 分までで、一日 9 時間（1 授業時間 = 45 分）となる。プロジェクトワークはこのうちの一部でしかない。その 12 日間のプログラムの中でプロジェクトワークが占める位置、時間割の中で配分などを次表に示す。

ほとんど毎日プロジェクトワークを表す「プロワ」という時間がある。

#### 4 インタビュープロジェクトの方法

##### 手順

##### 0) コース開始以前の教師側の準備

学習者の経歴に目を通し、プロジェクトワークのチームで学習者に相応しい内容を考え、相手方への打診等をして、スケジュールを組む。

- 1) コースの初日の月曜日、「プロワ 1」でプロジェクトワークをすることを告げる。それと同時に学習者に動機付けを行い、モチベーションを高めるよう働きかける。プロジェクトワークをどのように進行していくか、スケジュールについて説明する。インタビューでどのような質問をしたら良いかを話し合い、具体的な質問を翌日までに書いてくることを宿題に課す。
- 2) 2 日目、火曜日の「プロワ 2」では、学習者は自分の考えた質問事項をホワイトボードに貼り出し、発表し、質問の意図となぜそのような質問をしたいのか説明する。それに対する他の参加者からのコメントを聞く。教師はその時、ファシリテーターの役目を担う。つまり、学習者の様子を見て、話し合いを進め、学習過程を管理する。それとともに、教師はトレーナーとして質問文そのものも自然な日本語に直していく。
- 3) 3 日目、「プロワ 3」では、同じような質問をまとめたり、全体の流れから質問の順番を決めたりする。質問事項がすべて決まった段階で、参加者自身がコンピュータに入力し、プリントを作る。また、ペア、およびグループでインタビューをする場合、ペアを決め、だれがどの質問をするかなどの細かいことも話し合い、決定する。

- 4) 4 日目、「プロワ 4」はインタビュー前日の木曜日で、教師を相手にシミュレーションをする。発音、相槌の打ち方、聞き返し方等を練習し、本番でできるだけ流暢に発話できるよう訓練する。
- 5) 5 日目、金曜日の午後（先方の都合により木曜日のこともある）、インタビューに出向き、録音をする。その録音をインタビュー後に学習者全員および教師が聞けるよう、USB スティックなどに取り込んでおくこと、また、その録音を聞いてまとめを作ってくることを宿題とする。その時々のインタビュー・プロジェクトワークにより進み方は違うが、ヤポニクムではインタビューは常に 5 日目までには終わらせ、週末に聴くことができるよう配慮する。
- 6) 参加者は週末を利用して録音したインタビューを聞き、分かったことをできるだけまとめ、2 週目に授業で話し合うことができるようにする。それとともに教師も録音された内容をすべて聞き、音声から書き起こし、学習者にとって問題になりそうな箇所をチェックし、語彙リストを作成する。
- 7) 2 週目の「プロワ 5」、「プロワ 6」では、（時には「プロワ 7」までかかることもあるが、）2 日から 3 日かけてインタビューを全員で聞きながら問題点を話し合い、理解を深める。
- 8) 「プロワ 7」の時間中に、後にどのような形でプロジェクトワークの成果を残すか決定し、それに向け、水曜日の午後を利用してグループで作業をすることを指示する。この時間は、トレーナーとしての教師の助けが必要かどうかは学習者の判断に任せる。教師はプロジェクトワークの最後の時間となる「プロワ 8」の時間に、最終的な日本語チェックをするなど必要な手助けをする。

最終日、成果の発表をする。できるだけ、日本語が分かる人の参観を呼びかける。

本来、インタビューに応じてくださった方といつインタビューをするかのアポイントメントを取ること、またインタビューの後で御礼のメールなり手紙を書くこともなども、プロジェクトの一環としてするべきであるが、12 日間の集中コースではその時間はとれず、教師の方から御礼等をしている。

## 5 教師の役割

教師はプロジェクトワークでどのような役をするのか。参加者同士の協働学習を促進していくためにどのような役割を果たすべきなのか。

館岡（2006）は「①『学びの場』のデザイナー、②インストラクター、③ファシリテーター、④コーチ、⑤コーディネーター」と、また池田（2007）は「①活動のデザイン、②学習の人的リソース（情報提供）、③活動の支援（適度な介入）、④活動中の観察・記録、⑤言語形式の最終チェック」と分析している。

学習環境を作り、学びの場を提供する。そして、学びの実践を助け、促進し、自律的学習にもっていく。そして最終的には言語チェックを行い、正しく修正することが必要となる。

### (1) 動機付け

プロジェクトワークが成功するかしないかは、参加者の能力よりも最初の動機付けがうまくいくかどうかにかかっている。もちろん、能力も大きな要素であることは言うまでもない。（5(3)及び6を参照）

当研究所では教師はコース初日に初めて参加者と対面するのが普通である。参加者の実際の能力も、興味がどこにあるのかも、それ以前に知ることは難しい。それでも、参加者の12日間にかかる期待に応えるプログラムを用意して、できるだけ柔軟な内容、いろいろなケースを考えておくことが必要となる。

実際には、こちらが用意した内容のプロジェクトに興味を持ってもらうしかないので、まず、参加者の背景を聞き、どんなことをしてきたか、これからどんなことをするのか、様々なことを会話で引き出し、彼らの内的動機を真っ暗闇を手探りで歩くようにして探り出す。そして、プロジェクトワークをすることに意義があり、個人ではなくグループで協力し共に学んでいくこと、共に作業をすることで日本語能力が高まることを説明し、達成動機に刺激を与えるよう努力する。

ただ、初めて会った人の内なる動機を引き出し、プロジェクトワークをすることで日本語能力が高まるということを納得させるのは、かなり難しい作業である。その際、その難しいことを成功させる手段は「会話」しかない。

## (2) プロジェクトワークに対する理解

上級コース参加者は、普通は学生、若い人が多いが、それでも、プロジェクトワークのような学習形態を期待して参加する人は少ない。プロジェクトワークそのものを知らない参加者も多く、プロジェクトワークというと個人プロジェクトワークを考える人もいる。個人プロジェクトは今までに経験したことがあるからだ。ヤポニクムとするプロジェクトワークはあくまでもグループでのプロジェクトワークであり、協働で学ぶことに意義があることを、その方法をも含めてきちんと把握させることが必要になる。

プロジェクトワークでの協働学習というものが理解できていないと、インタビュー・プロジェクトなどでは、インタビューが終わり内容が分かると、その先は要らないと早合点し、作業が進まないこともある。

## (3) 参加者の能力の判定、および能力向上の促進

参加者の能力を教師側が把握することも重要な要素である。ヤポニクムでは、集中コース前に参加者の能力を測る試験はせず、学習者の自己判断でどのレベルのコースに参加するか、選び決定される。事前に電話等での相談、時にはインタビューもするが、あくまでも参加者に決定権がある。参加者は「お客様」であるからだ。自分の能力を過大評価し、教師の勧めを聞かず、能力が足りないにも拘わらず、上級コースに参加する人もいる。

教師が全員の能力を把握できるのは、初日である。初日の会話等を通して、参加者の能力を判断していく。初日に「動機付け」を会話で進めながら、その会話の中で一人ひとりの能力を判定していく。

プロジェクトワークは、こちらが用意していた内容のレベルが高すぎた場合も低すぎた場合も調整を強いられる。高すぎた場合は手に負えずいやになり、低すぎても適当に終えればよいという考えになりがちだ。

教師は学習者の状況に応じて、彼らの要求する語彙、文型を与え、そして、最終的に正しい日本語、自然な日本語で成果があげられるよう言語面のアドバイスをしていく。



#### (4) ティーム・ティーチング

やる気がなくなるような事が起こらないよう、期間中に微妙な調整をする。当研究所のコースはティーム・ティーチング、複数の教師がひとつのグループを交替で教えることが基本だが、この上級コースでも例外ではない。そのために、毎日の連絡は欠かせず、特にプロジェクトワークで、ティーム・ティーチングを実践するためには、教師は毎日ディスカッションをし、進捗状況、参加者の状態、これからの進め方などに関して話し合う必要がある。参加者一人ひとりの能力、性格、背景、健康状態など、様々な情報をできるだけ客観的に交換し合い、グループ全体がどのように動いているかも常に話し合う。

### 6 短期集中型のプロジェクトワークとして

12 日間の短期集中型のプロジェクトで、インタビュー・プロジェクト以外にどのようなプロジェクトワークが可能であるか、近頃、試した二例を紹介する。インタビュープロジェクト以外のプロジェクトワークをするにあたっては、教師側には、外部の日本人との接触がなくなり、学習者が活動中ドイツ語のみで話し合うことになるのではないかとの懸念を持ち、インタビュー・プロジェクトにとどまるべきであるという者もいた。一方、日本企業・機関での経済関係のインタビューを行うには学習者の能力が往々にして不足していることは、教師側の共通認識でもあった。話し合いの中で、プロジェクトワークという協働学習は様々なメリットがあるので、何らかの形でプロジェクトワークを続けていくべきだいう結論に達し、次に述べるような、インタビュー・プロジェクトではないプロジェクトワークをするに至った。

#### (1) 二つのプロジェクトワーク

一つは、当研究所、LSI を訪ねる日本人のために、「ボーフム中央駅からの道順、LSI の内部、大学食堂、大学センターなどの解説を作成」（2008 年度）することであった。もう一つは、「ヨーロッパ文化都市 2010 年、ルール地方」という行事に関連づけ、「エッセン、ボーフムなどのいくつかの観光地を日本語で解説し紹介」（2009 年度）することであった。「ルール地方（ボーフム）観光ガイド」の作成である。

結果は 2008 年のものが「ようこそ LSI へ」というパワーポイントでの紹介となり、2009 年のものが「ルール地方ガイ

ド」というパンフレットとなった。結果的に「ようこそ LSI へ」は学習者にも教師にも満足いく成果があがり、たやすく外部へ発信することができたが、「ルール地方ガイド」は学習者にも教師側にも不満が残り、外部への発信もためらわれた。以下、何が原因であったか分析を試みる。

## (2) テーマとゴール

第一日目の導入で、「ようこそ LSI へ」では参加者の動機付けをすることがたやすかった。何を、どのように、そして、何のためにするのか、分かりやすい具体的なテーマであったことが窺える。

それに対し、「ルール地方ガイド」は参加者にとっては一応は知っているドイツの地域ではあっても、初めてのルール地方であり、取り扱われる地域が大きすぎ、テーマ（観光地）がたくさんありすぎたと言える。つまり、こちらが与えたテーマが具体的ではなかった。一日目に先が見えなかった。やることは分かっても、ゴールが明確ではなかった。それでもどうにか、モチベーションを高め、興味を引き出すことができ、参加者は楽しい学習になるであろうことは分かったようだ。

## (3) 能力

初日の時点で、トレーナーとして教師が判断できたことは、2009年の参加者の日本語能力は2008年の参加者の日本語能力より劣るということだった。そして、客観的に見て、2009年のプロジェクトワークの内容は2008年の内容より難しいと言えた。

しかし、この時点で2009年のプロジェクトワークの内容を変えることは困難だった。「ヨーロッパ文化都市 2010年、ルール地方」は地域を挙げての行事であり、それに絡め、外部へ成果として得られるであろう「物」を発信しようとしていたので、この時点で他のものは用意していなかった。

初日にならなければ参加者の能力の本当のところは分からないというヤポニクムの抱える大きな問題が、表面化してしまったといえる。教師はやはりすべての参加者に電話でインタビューをしておくべきであった。

そして、代替プロジェクトワークを用意していなかったのは、教師側の怠慢であり、配慮不足であった。「ヨーロッパ文化都市 2010年、ルール地方」を利用したこのプロジェクトワークに固執し、自信過剰であったとも言える。後で考える

に、この 2009 年のテーマは、もし 2008 年の参加者に与えていたとしても難しかったのではないかと思われる。

能力以上のプロジェクトワークをした場合、グループ内で日本語ではなく、ドイツ語が多く使われだす傾向がある。一度、使われだすと歯止めがきかない。プロジェクトワークの時間内だけでなく、ほかの授業でも起こる現象となる。

#### (4) 進行状況

「ようこそ LSI へ」では、自分たちがポーfum 中心部から LSI へ来るまでの道順が分からず迷ったり、施設の使い方が分からず困ったりしたところを、出発点にすることができた。そこから、日本から初めて来る日本人ならきっとこんなことにも困るだろうと想像することが、たやすくできたようだ。写真を撮りに行く時も、どんな解説が必要か、すでに解説内容を具体的に思い浮かべながら、写真を撮ることができた。そして、何といっても取り扱った範囲が狭かったこと、これが、集中講座においては重要なポイントであったということ、翌年、教師は思い知ることになる。また、プロジェクトワークの中で、日本語の知識だけでなく、他の能力が必要になることがあるが、たまたまコンピュータを専門に勉強している学生、スケッチが得意な参加者がいたこともこのプロジェクトをスムーズにした。そして、教室活動のほとんどが主体的な活動に費やされ、教師は最終的な言語チェックをすることぐらいしか、手助けを頼まれなかった。また、この活動をするにあたって使用言語がドイツ語になってしまうのではないかという、当初心配したようなことは 2008 年には起こらなかった。

一方、「ルール地方ガイド」では、初日に自分の興味を出発点として、いろいろな資料を自分たちでも調べ、どこに行こうか、どこがおもしろいだろうと考えるところから始まった。すでにこの時点で、「ようこそ LSI へ」より、2-3 日の遅れを取っている。そして、参加者全員の興味が一致することはなく、投票でガイドする場所を決めることとなった。

その後、全員でそこを訪れ、写真を撮り、資料を集める。写真を撮りに行く日は前年度と同じ 1 週目の木曜日であっても、この時点で、何を意図して写真を撮るのか、どのような解説をつけるのかは、未知のままだった。そして、参加者が投票という手段で選んだ場所は、それぞれが点々と離れすぎていた。つまり、地域的にも範囲が広大だった。

訪問の翌日、一体どんな解説をつけていけばいいかが話し合われた。同時に、小さいグループで分担することが決まった。これはもちろん良いことだったのだが、そこで、コーディネータとして教師が気が付かないことが起こっていた。三つのグループに分かれ、それぞれが三つの課題（場所）を分担することになった。三つのグループに分けることを主張した参加者（2-3名）の本当の意図がその時、コーディネータ（教師）には見えなかった。

主張者たちの意図するところは、この先を個人プロジェクトにすることにあった。その決定がなされた直後にコーディネータ（教師）は気がついたのだが、結果はすでに出ていた。9人の参加者を三つのグループに分け、それぞれのグループに三つの課題を振り分ける。それが参加者の決定したことだった。この時点から、三つのうちの一つのグループでは、協働学習は否定され、週末を挟んで自分の好きな時に、適当に個人で仕上げればよいと決められた。自分の責任はきちんと果たす。結果は出る。しかし、そこに協働学習で学ぶという過程はなくなってしまった。

その影響は他の二つのグループにも及び、3人で話し合い、協働学習を試みていた参加者に、自分たちのしていることが良いことなのか、役に立つことなのか、迷いを与える結果となった。最終的に一見したところパンフレットはできた。参加者はそれを持ち帰ることができ、ある程度満足していたと思うが、何か物足りなさを感じていたようだ。

## (5) 参加者の意見

2009年度のプロジェクトワーク「ルール地方ガイド」の最終日、反省会で出た意見は、結局自分自身で受け持ちの部分を仕上げただけで、何のためのプロジェクトワークか分からなくなったというものであった。過程の中で、コーディネータの目が届かなかった。力が足りなかったという批判も述べられた。そのような意見を言った参加者こそ、最初から他の学習者との協力を拒んだ参加者あったことは、興味深い。そして、一人の参加者の影響がここまで及ぶということに教師一同驚いたことも確かである。教師にとって、学ぶことの多い体験であった。

以下、2009年度の反省点を挙げる。

- 取り扱った範囲が地域的に広すぎてまとまりがなかった。
- 最初にどのようなものができるか想像ができなかった。つまり、具体的な結果、成果が見えなかった。
- 参加者の能力に対して、課題の求めるものが大きすぎた。
- 途中で、個人プロジェクトに変化してしまった。  
そして、このプロジェクトワークが協働学習にならなかったことは、すでに触れたようにドイツ語が多く使われたことなども含め、コース全体、他の授業へ歓迎されざる影響も現れた。

## 7 今後の課題

今後インタビュー以外で、12日間の集中コースで取り扱うプロジェクトワークのテーマ選択の留意点として

- 課題が具体的であること
- 最終的な成果の可能性が探れること
- 興味が持てるプロジェクトであること
- 範囲が広すぎないこと
- 能力に合った課題であること
- 全体で取り扱えるテーマであること
- 負担になり過ぎないこと

などを挙げるができると思われる。そして、

- コース前に参加者の能力を測るべく電話でのインタビュー
- 初日のプロジェクトワークの意義の説明

などを徹底しなければならない。

残念ながら、参加者の日本語能力がどのように伸びたのかは、検証していない。また、することも難しいと思われる。前後で学習者にインタビューをし、能力の伸びをみようとしたことはあるが、伸びていても、それがプロジェクトワークによるものだと断言できない。しかし、プロジェクトワークをすることによって、なんらかの手ごたえを持ってコースを終えることができれば、今後の日本語の学習に広がるものがあると思われる。

また、学習者には反省会で口頭で意見を述べてもらうだけでなく、彼ら自身の内省に訴えるためにも、内的認識を高めるためにもアンケート型の評価を導入するべきである。その評価は学習者のためになるだけでなく、教師の内省へも訴え、反省を促すものとなるはずである。

12 日間という短い時間枠でその学習活動を円滑に行うためには、プロジェクトワークをコースの中に取り入れることは、役に立ち、集中的かつ効率的に相互活動を加速するだろう。プロジェクトワークという相互活動を通して、他の授業内容にも良い影響を与え、協働学習を促進していく。当研究所では成績評価がないこともあり、競争する必要もない。プロジェクトワークを通して、コース全体にお互いに協働学習をしようという雰囲気をもっと育てることにより、そして、コースすべての「活動の課程でお互いに影響を及ぼし合うことにより、学びの相乗効果が生まれる」（桑野・佐藤 2007）のだ。それが、とりもなおさず、週末も含めてたった 12 日間のコースで有意義に効果的に学ぶことにつながっていくと考える。

### 【引用文献】

- 池田玲子 (2007) 「ピア・レスポンス」  
[www.koryu.or.jp/nihongo/ez3\\_contents.nsf/17/97219B0222EEBD D64925727C00295BBB?OpenDocument](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/17/97219B0222EEBD D64925727C00295BBB?OpenDocument) 2010 年 9 月
- 桑野幸子・佐藤五郎 (2007) 「新たな協働学習の試み」  
[wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/2007/yokou/W2kuwano.pdf](http://wwwsoc.nii.ac.jp/nkg/kenkyu/2007/yokou/W2kuwano.pdf) 2010 年 9 月
- 館岡洋子 (2007) 「ピア・リーディング」  
[www.koryu.or.jp/nihongo/ez3\\_contents.nsf/17/97219B0222EEBD D64925727C00295BBB?OpenDocument](http://www.koryu.or.jp/nihongo/ez3_contents.nsf/17/97219B0222EEBD D64925727C00295BBB?OpenDocument) 2010 年 9 月
- 田中望・齊藤里美 (1993) 『日本語教育の理論と実際』 大修館書店

### 【参考文献】

- 江原美恵子・小林友美 (2008) 「企業インタビューをプロジェクトワークとした日本語初級学習者と授業参加者の協働」 『電子情報通信学会技術研究報告』 電子情報通信学会
- 久野由宇子 (2007) 「ピア・ラーニングを取り入れて口頭表現力を伸ばす方法を探る」 『日本語教育実践研究フォーラム報告』
- 館岡洋子 (2007) 「ピア・ラーニング」 『日本語教育通信』
- 館岡洋子 (2007) 「協働学習としてのピア・リーディング」 『日本語教育ブックレット 9 教室活動における協働を考える』 国立国語研究所